

平和紙芝居に関する基礎的な研究『ふうちゃんのそら』を事例として

正 司 顯 好・浅 井 拓久也

A Preliminary Survey on peace Kamishibai “*Fuuchan no sora*”

SHOSU Akiyoshi, ASAI Takuya

キーワード：平和紙芝居、よこみちけいこの世界、
中峠房江の世界、関家ひろみの平和
活動

1 はじめに

2018年2月7日紙芝居文化の会は、一般社団法人日本記念日協会から毎年「12月7日」を「世界 KAMISHIBAI の日」として正式登録することを認められ「記念登録証」を受理した。

それを受けて紙芝居文化の会は2018年12月7日に向けて次のメッセージを世界に発信した。「12月7日は「世界 KAMISHIBAI の日」です。この日、私たちは、紙芝居を通して平和を希求します。紙芝居を愛する人たちと一緒に、日本中、世界中で紙芝居を演じ、楽しみましょう。そして、共に生きるための共感の世界を広げていきましょう。」¹⁾

その紙芝居文化の会の呼び掛けにいち早く行動を起こしたのが、「鹿児島県でボランティアを続けるグループ「桜の樹」で、代表の榎園小百合は「紙芝居は平和につながる活動」という。榎園は夫の転勤に伴って広島県呉市で過ごした1年が転機になった。1945年7月の呉空襲にあった少女の体験を描いた『ふうちゃんのそら』の原案者である中峠房江と出会い、本格的に紙芝居の勉強を始めたという。この日も子どもたちの未来の平和を願い『ふうちゃんのそら』を演じた。「世界 KAMISHIBAI の日」にちなんで「桜の樹」は12月1日もかごしまメルヘン館で紙芝居の上演会を

開き『ふうちゃんのそら』を実演する。」(2018年11月28日(水)朝日新聞・朝刊掲載記事より)
「この紙芝居『ふうちゃんのそら』は2015年6月広島県呉市に住む中峠房江(79)の戦争体験に基づいて作られた紙芝居である。それまで中峠は「人形劇あひる座」の代表として地元を中心に四十年以上人形劇を子どもたちに演じながら同時に自らの戦争体験も語ってきた。その一方で「どうしても語りだけじゃ戦争の悲惨さがつたわっとるという実感がもてなかったんです。」「戦争の悲惨さが絵を見たらひと目でわかるのは紙芝居しかない！」と長い間思っていた。そんな折、偶然にも同じ呉市に住む絵本作家よこみちけいこに出会ったのだ。たまたま立ち寄ったよこみちの原画展で見た絵が中峠の子どもの頃とそっくりで「これ、子どもの頃のわたしじゃけん！」と思わず言葉が漏れたようだ。そんな二人が点と点が重なり合うように打ち解けあって紙芝居作りが始まった。そして紙芝居『ふうちゃんのそら』が完成し2015年7月、戦後70周年呉空襲慰霊祭、和庄公園(ふうちゃんが逃げ込んだ防空壕)にて中峠房江による実演がスタートした。この慰霊祭の様子が地元タウン誌に紹介され、新聞にも大きく取り上げられました。この1年半、保育所、幼稚園、小学校、児童会、中、高、大学、図書館、高齢者施設、育児サークル、おはなし会、老人会や教会など様々な場所でも実演は115回となりました。」²⁾

その後も広報活動の中心的な役割は「呉かみしばいのつどい」代表の関家ひろみ(紙芝居の編集にも関わる)が担当し、地元呉市を中心に全国展

開（2016年NHK総合「こども手話ウィークリー」、2018年NHK総合「いのちのうたフェス」放映。2017年読売新聞、2018年朝日新聞に掲載。）していった。そんなよこみちけいこの代表作『ふうちゃんのそら』（原案・中峠房江）を取り上げ、平和についてこの紙芝居が果たす役割について作家・演者・観客それぞれの視点から考える。紙芝居『ふうちゃんのそら』は2017年7月自費出版され2018年12月現在で350部まで販売をのびしてきている。

2 調査の概要

(1) 調査目的

紙芝居作家よこみちけいこが、どんな思いで平和紙芝居『ふうちゃんのそら』（原案・中峠房江）を創作したのか本人へのインタビューから考察する。さらにこの作品を演じる演者としての立場からと紙芝居を見る観客としての立場からも考察し、平和について紙芝居が果たす役割について考えることを目的とする。

(2) 調査対象

平和紙芝居『ふうちゃんのそら』原案・中峠房江、脚本・絵 よこみちけいこ、監修・呉かみしばいのつどい

2017年7月自費出版（18場面）

(3) 調査方法

論文執筆者の正司顯好が交流のある呉かみしばいのつどい代表の関家ひろみに司会進行役を依頼し、よこみちけいこからインタビューによる聞き取り調査を実施した。

(4) 調査時期

2018年11月22日（木）午後3時00分～午後5時00分に実施した。

3 調査の結果

（インタビュー内容）

〈日時〉2018年11月22日（木）午後3時00分～午後5時00分

〈場所〉呉市役所、生涯学習センター会議室 402
〈テーマ〉紙芝居作家として生きて思うこと（平和について）

〈インタビュアー〉関家ひろみ（呉かみしばいのつどい代表）

〈インタビューイ〉よこみちけいこ（絵本・紙芝居作家）

【第1場面】



〈作家インタビュー①〉

（聞き手）第1場面について大切にされたことは何ですか。

（よこみち）みんなに見てもらおう紙芝居を作るといふより原案を作られた中峠房江さんの戦争体験から平和の大切さを伝えたいという夢をかなえるためにこの作品を手掛けようと決心した。中峠さんは長年人形劇を実演されてこられたので絵の中に人形を作っているシーンを入れた。脚本は、中峠さんから「今でも花火を見るのが怖い」と聞いていたので夏祭りの花火大会のシーンから入りたいたと考えた。

〈演者の視点からの考察①〉

紙芝居の手法として現在—過去—現在という展開はあまり好ましくないという意見もあることを知っ
ていながら、あえてその手法を採用したようだが、例外的にそれが見事に成功した作品になった。よこみちは元々絵本作家であるので紙芝居の絵を描くとき、細かいものを削除するのに苦労したようだ。

この場面は孫のみいちゃんとばあちゃんの会話で始まる。「みてみて～！ きょう はなび たいかいに いくんよ！」「かわいいねえ。よおにおうとるよ」広島県呉市の方言である。こうした響きが土地の空気を漂わせるが、見知らぬ土地の方言を物真似して読むと不自然さが際立って作品全体の調和を損なうことがあるので、不自然になる方言を無理に使うのではなく、演者が自然に演じられる会話を心がけたい。

【第2場面】



〈作家インタビュー②〉

（聞き手）第2場面で大切にされたことは何ですか。

（よこみち）この場面から戦争当時の過去に戻る
ので絵はシンプルにふうちゃんだけにした。中峠
さんから当時の髪型、夏でももんぺ姿だったのを
聞いていて、いつも歌を歌っていた明るい性格の
ふうちゃんを描きたかった。

〈演者の視点からの考察②〉

この第二場面からは、戦争当時の過去の話になり、主人公のふうちゃんが登場する。脚本（裏面）が書かれた隣には「ふうちゃんのそらによせて」の中峠さんの文章が掲載されている。「私にとって「手をにぎる」ことは大きな意味があります。—中略—それは愛です。そして平和を願う強い気持ちです。」とある。手をにぎることによってひとりの尊い命が救われ、その命からさらに新しい命へと繋がっていく中で、大切なものは何かを伝えようとしている作品であることを演者は深く理解した上で演じることが望まれる。

演者は、しっかり画面をのぞき込み観客と共にこの主人公であるふうちゃんの笑顔を共有しながら画面を抜くことが望まれる。

【第3場面】



〈作家インタビュー③〉

(聞き手) 第3場面で大切にされたことは何ですか。

(よこみち) 中峠さんから作品の後半でお父さんが戦争の犠牲になって、亡くなるのを聞いていたので、ここでおとうさんとふうちゃんの日常を描きたかった。中峠さんのために作った紙芝居なので「はちふく」といううどん屋の屋号も書き込むことにした。当時のおとうさんは38歳、ひつまめ髪のおかあさんは35歳、ふうちゃんは7歳だったそうだ。

〈演者の視点からの考察③〉

ふうちゃんの家環境を紹介する場面です。「まちで ひょうばんの」うどん屋さんで両親の愛情いっぱい家庭で育っているふうちゃんとおとうさんの会話を楽しく演じながらも、おきゃくさんの「呉は ～ ねらわれとるんよ。」というひそひそ声の内容もしっかり観客に届くよう演じることが望まれる。演出ノートにあるように呉市

は戦艦大和を建造した東洋一の軍港であったという歴史的背景も理解して演じることが望まれる。

【第4場面】



〈作家インタビュー④〉

(聞き手) 第4場面で大切にされたことは何ですか。

(よこみち) 中峠さんから小さい時は習字の準備が嫌いだったと聞いていたので、国民小学校でのこの場面は国語でも他の科目でも良かったけれど、あえて習字にこだわりました。先生も背広ではなく茶の国民服と帽子、机も二人掛けだったそうです。

〈演者の視点からの考察④〉

国民小学校での日常が中峠からの詳しい聞き取りに基づき描かれているが、突然の警戒警報によって非常事態に変わっていく様子を緊迫感を持続させながら演じることが望まれる。

逃げ遅れれば命を奪われてしまうほど身近に迫ってくる戦闘機の低い不気味な音にも演出効果が

高まるように演じることが望まれる。

【第5場面】



〈作家インタビュー⑤〉

（聞き手）第5場面で大切にされたことは何ですか。

（よこみち）中峠さんから「空からサイレンの音や飛行機の音が聞こえてくるんよ。空が見られん。顔が上げられんのよ。」というのを聞いていたので、赤い頭巾を被ったまま下を向いて必死に走るふうちゃんの姿を描きました。脚本には「授業どころではありませんでした。」などの文章を入れていたが、かなりの分量をカットしていきました。

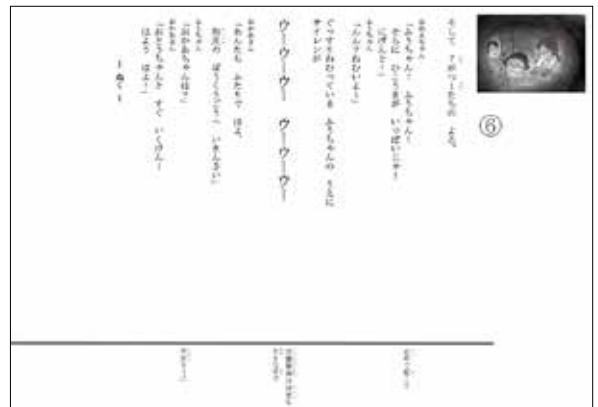
〈演者の視点からの考察⑤〉

警戒警報によって毎日繰り返される日常と非日常（非常事態）の中で命ギリギリの生活を送らなければならない戦時下の様子をふうちゃんの視点から演じることが望まれる。

この場面でのふうちゃんの赤頭巾は第8場面の

絵に繋がっている。防空壕の中に逃げ込んで何千人という多くの人の波の中で押しつぶされて、まさに息絶えようとしているふうちゃんを絵で見事に表現している。遠目の効く絵に仕上げるための赤頭巾は効果的な伏線になっている。「こわいよ。こわいよ。」と言いながら空を見上げることができないふうちゃん。地面だけを見つめながら走るふうちゃんの姿は、第18場面への伏線にもなっている。

【第6場面】



〈作家インタビュー⑥〉

（聞き手）第6場面で大切にされたことは何ですか。

（よこみち）夜間の寝室での場面で、青使いで紺が入ってきた。おねえちゃんは眠っているふうちゃんを起こしているのですがすぐ隣に居るが、お母さんの立って居る位置は部屋の外から話しかけているので、絵の中でも十分奥行きを出したかった。

脚本は、最初の頃は防空壕に逃げ遅れたことになっていたがカットした。中峠さんは空襲警報の「ウ～ウ～ウ～」を聞くたびに「はよ逃げ はよ

逃げ はよ逃げ」と言われているように感じたそう
うだ。

〈演者の視点からの考察⑥〉

戦時下の日常と非日常は昼間だけでなく夜間
においても突発的に警戒警報によって起きる。この
日は何度も大きな音が繰り返され、空襲警報に変
わっていった。ぐっすり眠っているふうちゃんを
急いで起こすおねえちゃん。まだ幼いふうちゃん
は「んん？ ねむいよ～」としか応えられない。

ふうちゃんの上から空襲警報が鳴り響く。警戒
警報（第4場面）は長いサイレンの音で知らせる
が、空襲警報は短いサイレンの音に変わるので、
はっきりと演じ分けなければならない。

そんな二人に部屋の外からお母さんが防空壕に
逃げるように指示を出す。ふつうなら親子一緒に
逃げるところだが戦時下の非常事態では、まず子
どもの命を優先しなければならなかったのだろう。
緊迫感を出すためにも、三人の会話の距離感を考
えながら演じることが望まれる。

【第7場面】



〈作家インタビュー⑦〉

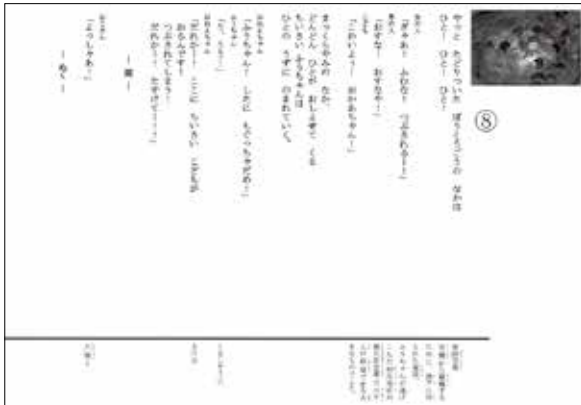
（聞き手）第7場面で大切にされたことは何です
か。

（よこみち）私自身戦争体験が無い上に、爆撃シ
ーンはこの場面だけなので構図と色を考えるのが
難しかった。脚本は、おねえちゃんのセリフはあ
るがふうちゃんのセリフは無し。中峠さんからは
「真に怖さが迫ってくる中を明るくて暗くて「ド
ォーン！ ドッガン！」という爆撃音だけが聞
こえてくる誰もいない道を二人で走った。おねえ
ちゃんの方が走るのが早い最後まで手を放さな
かった。」ということ聞き、しっかり表現した
かった。

〈演者の視点からの考察⑦〉

夜間であっても「ばくげきで あたりは ひる
まの ように あかるい！」（脚本）まるで火の
海をおねえちゃんとふうちゃんは必死で走り抜
けながら防空壕に逃げていく。「ふうちゃん、て、
て、手を はなしたら いけんよ」（脚本）の手
を全体の流れの中でどう捉え演じるかを考えるこ
とが望まれる。ここでもこの時、被っているふう
ちゃんの赤い頭巾は、第8場面の絵の伏線になっ
ている。

【第8場面】



〈作家インタビュー⑧〉

(聞き手) 第8場面で大切にされたことは何ですか。

(よこみち) やっとの思いで逃げ込んだ防空壕の中の様子を描くのに黒を使うと沈み込むので藍色にしました。最初は逃げ惑う人の表情を描いていたが、6000人収容できる防空壕が満杯状態で、ほとんど身動きができず小さな子どもたちは押しつぶされていった。そんな中でふうちゃんも死にそうになっているのを絵で観客に伝えたかった。現在の満員電車の中の人々の顔の表情を参考にしながら描いた。

〈演者の視点からの考察⑧〉

演出ノートには防空壕の説明がある。この和庄の防空壕跡地には慰霊碑が立てられて、その日亡くなられた800人以上の人々のために慰霊祭も行われている。そんな状況の中でふうちゃんもまさに息絶えようとしている瞬間を切り取って演じることが望まれる。暗闇の中で一点赤い頭巾を描く

ことで遠目が効く絵に仕上がっている。さらにこの場面の最後に大きな転換点になる「よっしゃあ！」のセリフをどう声に乗せて演じるか。この「よっしゃあ！」のあとの情景（救済シーン）が観客の目に浮かぶように演じることが望まれる。

【第9場面】



〈作家インタビュー⑨〉

(聞き手) 第9場面で大切にされたことは何ですか。

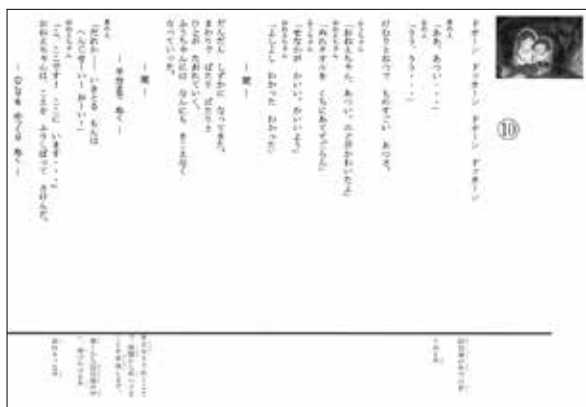
(よこみち) ふうちゃんの手が見知らぬおじさんの手でひっぱりあげられて九死に一生を得る場面です。見知らぬおじさんにしがみついて泣いているふうちゃんの様子を描くのが難しかった。色を何度も重ねて塗るのだが、暗闇の中のおじさんの後姿を太線もしっかり入れながら描いた。

最初、ふうちゃんは目を開けていたが変更した。中峠さんから「なみだでうるんだ目がいいね。すごいね」と言っていただいた。最終的には白の修正ペンやクレヨンを使って描いた。

〈演者の視点からの考察⑨〉

命の恩人である見知らぬおじさんのセリフは2カ所だけです。「もうたいじょうぶじゃ！ しんぱい せんで ええど」「おねえちゃんの手、はなすなよ！」そういつて どこかへ いつてしまった（脚本）全体の流れの中でこのおじさんはどんな存在なのか、果たす役割、人物像を自分の中で作りながら演じることが望まれる。この場面には登場しないこの見知らぬおじさんを表現するのによこみちさんは後姿だけで勝負したところに画家としての力量を感じる観客も多いであろう。この場面では脚本の中でキーワードの「手」という漢字が3カ所登場する。

【第10場面】



〈作家インタビュー⑩〉

（聞き手）第10場面で大切にされたことは何ですか。

（よこみち）その場に倒れ込んだまま死んでいく人々の中でふうちゃんを大きく包み込むおねえちゃん（当時中学生）を表現したかった。絵を入れ

られるのは、いくらでもできるが、紙芝居はどこまで削れるかが難しかった。

ふうちゃんの赤い頭巾はどこかへ消えていて、静かな黒の世界の中で二人の近くに倒れた人の手と足を部分的に挿入した。

〈演者の視点からの考察⑩〉

よこみちがこだわったおねえちゃんの包容力をおねえちゃんのセリフ「ぬれタオルを くちにあててごらん」「よしよし わかった わかった」（脚本）の会話文でどう読むかが重要です。この場面を見た観客で「このおねえちゃんみたいになりたい」という子どもたちが多いのも頷ける。絵をよく見るとおねえちゃんは靴を履いているが、ふうちゃんは裸足になっている。これは次の場面への伏線になっている。さらにこの場面の最後に防空壕の外から男の人が「だれかー！ いきとるもんは へんじせーい！ おーい！」と叫ぶ。その呼びかけに対し「ここです！ ここにいます・・・」とおねえちゃんは、絞り出すような声で応える。二人の距離がどれくらいあるのか考えながら演じることが望まれる。

【第11場面】



〈作家インタビュー⑪〉

〈聞き手〉第11場面で大切にされたことは何ですか。

〈よこみち〉防空壕の中に光がさして、暗闇からふうちゃんが救われるシーンを一枚の絵で表現したかった。目の感じがなかなか出せなくて難しかった。小さなラフをいくつも描いたが、最初のラフが一番良かった。脚本は、防空壕の中に「ごろごろする死体」という言葉をあえて入れた。

〈演者の視点からの考察⑪〉

気を失っていたふうちゃんはおねえちゃんに勇気づけられながら光の中へ出て行こうとする。暗闇の中に差し込む光がまばゆく観客にも映る絵に仕上がっている。光に向かうふうちゃんの目の輝きが演出できるような演じ方、特に外界から光が射し込むような画面の抜き方が望まれる。

【第12場面】



〈作家インタビュー⑫〉

〈聞き手〉第12場面で大切にされたことは何ですか。

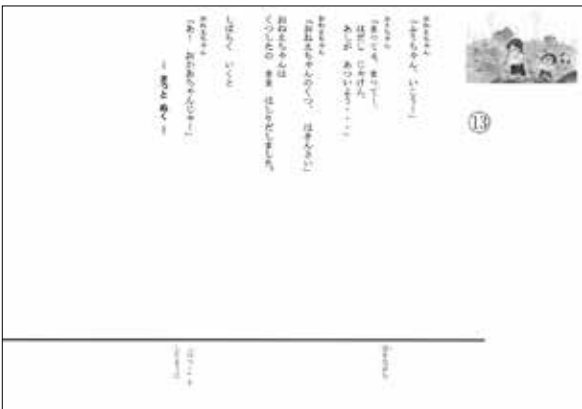
〈よこみち〉防空壕から出てきたふうちゃんは、紫色の血を流して死んでいる人や、黒焦げの死体が近くに転がっていても何も思わなかったと、中峠さんから当時を振り返りながら聞かされた。最初は大きく目を見開いたふうちゃんを描こうかと考えたが、最終的に後ろ向きの姿になった。脚本も「ここ…、どこ？」にすべてが集約されるようにした。小さい子どもがこの何もなくなった広い世界を見た時、「ここ…、どこ？」しか言葉にならないと考えた。ただ、すべてを焼き尽くしたにおいがすごくあった、と中峠さんから聞いていたので、それも感じてもらえる絵を描きたかった。

〈演者の視点からの考察⑫〉

ふうちゃんが後ろ向きの姿で描かれたことで観客も同じ目線に立って、この「ぜんぶもえてなくなって」（脚本）しまった世界を見渡すこと

ができる絵の構図になっている。B29爆撃機による呉空襲の惨状をふうちゃんの「ここ…、どこ？」のセリフにどのように思いを込めて演じるか何度も自問することが望まれる。

【第13場面】



〈作家インタビュー⑬〉

〈聞き手〉第13場面で大切にされたことは何ですか。

（よこみち）この場面を別の絵に変更しようとしたが中峠さんが止めた。前場面との連続性を感じさせる絵がほしいということになった。脚本は実際の会話を採用した。おねえちゃんが靴下のまま走り、ふうちゃんはおねえちゃんのぶかぶかの靴を履いて後からついていく。実際には街全体が爆撃により焼き尽くされていたので地面が熱くて歩けなかったらしい。この靴の歩きづらいぶかぶか感を出すのが難しかった。

〈演者の視点からの考察⑬〉

「おねえちゃんのくつ、はきんさい」おねえち

ゃんはくつしたの まま はしりだしました。」（脚本）というセリフで観客の多くは涙を流す。姉が幼い妹を包み込む愛情と包容力に感動の涙が流れるのです。そしておかあちゃんに再会。自分を支えるだけでも精一杯の状況下での姉の気持ちを考えながら会話を演じることが望まれる。

【第14場面】



〈作家インタビュー⑭〉

〈聞き手〉第14場面で大切にされたことは何ですか。

（よこみち）ここまで耐えに耐えてきたおねえちゃんのギリギリの感情を表現したかった。脚本では、おかあちゃんの顔を見るなり堰を切ったように泣きじゃくるおねえちゃんを表現したかった。ふうちゃんの顔の表情は絵に入れなかった。中峠さんから「私はあの時、泣けなかった。胸が痛くて痛くて。痛い泣けんのじゃ」ということを聞いていたが「ふうちゃんは泣きませんでした。」というセリフはカットした。背後におとうさんが少しだけ血を流して板の上に横たわっている姿が

小さく見えている。絵に奥行きを作りたかった。

〈演者の視点からの考察⑭〉

三人が再会したにもかかわらずふうちゃんは一
言も発しない。発せないのだ。泣くこともできな
いのだ。胸が痛くて、痛くて。板の上に横たわる
負傷したおとうさんの絵は次の場面への伏線にな
っているのだ。おかあさんのセリフを語る時は次
の展開を含んだ演じ方が望まれる。

【第15場面】



〈作家インタビュー⑮〉

(聞き手) 第15場面で大切にされたことは何です
か。

(よこみち) この場面は第2場面との対比で、ふ
うちゃんだけの絵にしようとして最初から決めていま
した。バックの色は白。第2場面も白。しかし、
この場面ではふうちゃん表情を通して戦争の悲
惨さを表現したかった。

脚本も、自分たちが防空壕から生き返ってきの
に、お父ちゃんが死んでしまう。ふうちゃんの

「おとうちゃん…、おとうちゃん…」の演じ方は、
心が空っぽになった声で演じてほしい。「…」の
「三点リーダ」を使うかどうかはかなり迷ったが、
使うことにした。中峠さんからは、片足を吹き飛
ばされたおとうさんの状況は聞いていたが、その
しんどさは出来るだけカットし「おとうさんは
(中略) ばくだんにあたったのです」の三行だけ
にした。

〈演者の視点からの考察⑮〉

この場面で重要なのは、時間の経過をいかに
演じるかだ。B29爆撃機による呉空襲が7月1日。
広島に原子爆弾が投下されたのが8月6日。戦争
が終結したのが8月15日。その時間の経過を考
えながら演じるのが望ましい。

さらにあえて原爆投下をこの紙芝居からカット
し、ふうちゃんの体験を中心に作品を仕上げた作
者の意図を考えながら演じることが望ましい。

【第16場面】



〈作家インタビュー⑬〉

〈聞き手〉第16場面で大切にされたことは何ですか。

〈よこみち〉絵を描いた場面があと二場面あったが思い切ってカットした。この場面の最後に一番花火が上がる脚本になっているが花火の絵はあえて描いていない。みいちゃんのセリフも「「おばあちゃん 生まれて くれて よかった。」ほっとしたように言いました。」をカットして「ばあちゃん…、しななかったんじゃね。えかったあ〜」に変更した。多くの人から様々な意見を聞きながら脚本を作り上げていった。

〈演者の視点からの考察⑬〉

ここは、過去の戦争体験の話から現在に戻る場面ですが、自分の孫に初めて戦争について語り終えたばあちゃんの心境を考えながら演じることが望まれる。

「いまでも はなびを みると あの くうしゅうの ことを おもいだすんよ」とばあちゃんが言った時「ドーン！」と夜空に花火が上がる音をどんな音で表現するのが難しく、絵に無い花火を観客に想像させるように演じることが望ましい。

【第17場面】



〈作家インタビュー⑭〉

〈聞き手〉第17場面で大切にされたことは何ですか。

〈よこみち〉ばあちゃんとみいちゃんが手をつなぐ場面だが、ばあちゃんの手はしわしわにさせてもらった。戦争をくぐり抜けてきた手にしたかった。

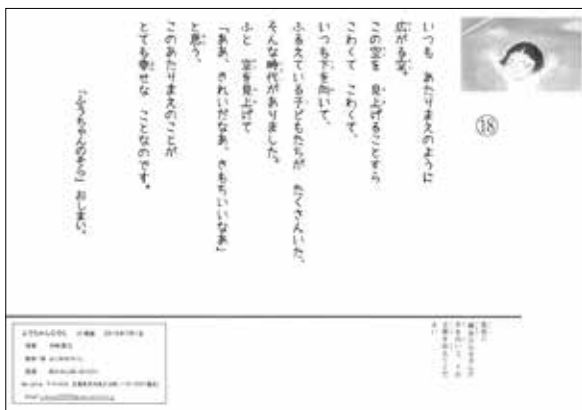
中峠さんから「手をつなぐことは命をつなぐことじゃ」と聞いていたので、この場面は手をつなぐ絵を描いて、脚本は「にっこりわらいました。」でしめたいと最初から決めていた。

〈演者の視点からの考察⑭〉

現在—過去—現在という時間の経過をたどりながらおばあちゃんとみいちゃんの話は終わります。最後この場面でも作品全体を通じてキーワードになっている「手」が出てきます。「て」と読みがながついているこの漢字の「手」は、第7場面で1回、第9場面で3回、第11場面で1回、第17場面で1回と合計6回出てきます。この「手」を

それぞれの場面でどう捉えて演じるかを深く考えてみる事が望まれる。

【第18場面】



〈作家インタビュー⑱〉

〈聞き手〉第18場面大切にされたことは何ですか。

〈よこみち〉第17場面の「手」のシーンで終わらせたいという意見が多かったが冒頭に話したように中峠さんの思いを伝えるための紙芝居なので、物語は第17場面で終わりだが、余韻として訴えながら朗読する最後の場面を作った。脚本はその日のうちにできた。この場面を見ることで子どもたちが空を見上げる行為につながった。

〈演者の視点からの考察⑱〉

この場面は紙芝居が終わった後、物語全体を外から俯瞰した語りになっていますから、これまでとは演じ方が変わってきます。声の大きさ、間の取り方、観客への向かい方も含めて自分なりに最も効果的な終わらせ方を探すが望まれる。

4 まとめ

(1) 『ふうちゃんのそら』に対する観客の意見と演者の視点からの考察

本作品に対する観客（養成校学生や保育者）の意見を整理すると、戦争体験を扱った難しい紙芝居であるにもかかわらず、作品の理解のしやすさが大半を占めていた。^(注1)たとえば、「子どもにも理解できるストーリーで分かりやすい内容のように感じた。」「未来の子どもたちの平和につながるために、この紙芝居はとても大切だと思った。」「この紙芝居を通じて子供たちの命の大切さ、尊さを感じてもらいたいと思った。」「お父さんを失う悲しみが、子どもたちに伝わる紙芝居だと思う。身近な家族を戦争でなくしてしまうことが、戦争をしてはいけないという気持ちにつながるので、子どもたちにしっかり演じたい。」「親しみやすく温かな絵で、冷たい戦争が描かれていて心が痛くなった。最後までずっと集中して観ることができた。」「当たり前（空を見上げること）が当たり前でないということに気づかされました。今があることに、今大切な人たちに囲まれて過ごしていることに、幸せを深く感じる事ができた。」「二度と戦争が起きないようにするためには語り継ぐことが大切であり、今後の平和活動のきっかけになると考えました。手をつなぐことは、命をつなぐことという言葉が印象的でした。」

このような意見が大半を占めた背景には、主人公であるふうちゃんという子どもの存在が、園児たちにも感情移入しやすくなるのであろう。実際、「ふうちゃんの気持ちになって考えることができたので」、「ふうちゃんの視点で書かれているので」という意見があるように、観客自身をふうちゃんに重ねて内容を追うことで、理解が深まっていることがわかる。と同時に実際に戦争を体験した中峠房江の平和を希求する強い思いがよこみちけいこに見事に手渡され、この作品を見る観客の心を震わせるのである。

ところが呉かみしばいのつどい代表の関家ひろ

みから「呉では中峠さんがいるので、他の人たちは彼女の前では謙遜したり、遠慮したり、しり込みしたりで『ふうちゃんのそら』を実演することが、ほとんど無いのです。」ということを知った。残念なことだ。確かに演者の立場で、この作品を下読みした段階で感極まって涙が止まらなくなる人も多いであろう。演者として観客の前で失態をさらすわけにはいかないという思いが、さらに強まってしまっただろう。

しかし演じてこそ紙芝居という言葉があるように、観客としての立場から演者としての立場に移行することで、さらにその作品理解が深まるのである。下読みで何故その箇所感極まってしまうのかを考える時、これまでの自分自身を振り返り深めることになるのである。紙芝居が演者を育てる瞬間であり、そこを突き抜けて観客の前で、この紙芝居を演じたとき初めて演者のなかでストーンと腑に落ちるものが生まれる。平和紙芝居『ふうちゃんのそら』を一人ひとりの演者の解釈によって『それぞれのそら』を語り継ぐことが、中峠房江の平和を希求する想いにもつながっていくのである。

(2) 本作品を子どもたちに届けるために

本作品は、戦争の悲惨さや平和の大切さを訴えかけるものである。こうした作品を繰り返し演じることで、子どもが平和の大切さを理解していくということはある。しかし、それ以上に重要なことは、毎日の保育の中で平和の大切さを伝えることである。平和紙芝居の作品がイベント的に扱われるのではなく、日々の保育とつながっているかどうか重要なのである。

この点は、『保育所保育指針解説書』でも指摘されている。³⁾ 同書によると、以下の引用にあるように、紙芝居や絵本からの学びと、生活が結びつくことが重要である。

例えば、ゆったりとした雰囲気の中で、子どもと保育士等が対面で絵本を開くと、子どもは犬の絵を指差し「ワンワン」と言葉を発する。保育士等がそれに応じて「ワンワンだね。しっぽをフ

リフリしているね。」と状況を丁寧に語ると、子どもは保育士等の顔を見上げて「フリフリ」と言う。保育士等はさらに、「フリフリしているね。ワンワン、嬉しいのかな。」と言葉を続ける。また、こうした絵本を読んだ後散歩に出かけた時、犬に出会うと、子どもが「ワンワン」と指差すことがある。そこで保育士等が「ワンワンだね。絵本のワンワンと一緒にかな。」「しっぽ、フリフリしているかな」と実際の体験と絵本をつなぐ言葉をかけてみる。保育所に戻ると、子どもは先の絵本を手に取り、犬のページを開き喜々としてまた「ワンワン」と言う。

『ふうちゃんのそら』から子どもたちが学んだ戦争の悲惨さや平和の大切さを、地域交流と結びつけたり、平和のシンボルを調べ合ったりすることで、日々の保育とこれらの作品がつながっていくのである。

保育者として、これらの作品を適切に演じることは重要であるが、作品と日々の保育の展開をしっかり結びつけることはそれ以上に重要なことなのである。

(3) 平和紙芝居の果たす役割とは

原案者である中峠房江は紙芝居『ふうちゃんのそら』を創案し演じるだけでなく、紙芝居を通して日々の生活の中でも平和についての活動を展開しようとしている。2018年7月中峠は呉空襲で実際に逃げ込んだ和庄の防空壕の近くにある市立和庄中学校3年生90名を対象に『ふうちゃんのそら』を演じる機会に恵まれた。演じ終えて生徒の一人が中峠に質問した。「平和のために何かできることは、ありますか?」中峠は「家族を含め、あなたが知っている人に、今日のことを話してください。」と即答した。その日、和庄中学校3年生ほぼ全員が帰宅後、紙芝居『ふうちゃんのそら』の実演について家族に話した。その内容を生徒たちは手紙としてまとめ後日、中峠に送った。

その一部を紹介する。「うちのおじいちゃんは戦争が終わってシベリアから帰った人だと言いました。僕はそのことを初めて知りました。」「うち

のおじいちゃんは特攻隊に入っていて戦地に向かう直前で終戦になったと言いました。おじいちゃんとおばあちゃんから戦争の話を聞いてびっくりしました。「家族でこれからも平和について学んでいこうという話になった。家族で平和に対する思いが重なって一つになった。」「中峠さんのように戦争を経験している人を初めて見ました。その人と同じ場所で同じ息をしていること、その人が子どもの時に実際に体験したことだということに驚いた。」「世界では今も戦争をしている国があります。平和が一日でも早く訪れるよう今自分に出来ることを探して平和活動をしていきたい。」「原爆のことは知っていましたが呉空襲のことはあまり知りませんでした。戦争は“昔のこと”と自分の中でフタをしていました。今回、紙芝居を見て改めて戦争の悲惨さを知り、中峠さんの平和への熱い思いが伝わってきました。この紙芝居を見たということだけに終わらせるのではなく、次世代に平和の大切さをつなげていくことが私たちの使命だと思いました。」

そんな生徒たちからの手紙に中峠房江は次のような手紙を出した。

「前略、紙芝居『ふうちゃんのそら』講演ではたいへん世話になりました。一中略— 驚いたのは、祖父母さん達が呉空襲を体験しているのがわかったり、おじいちゃんが海軍兵士だったり、特攻隊だったことやシベリヤに抑留され帰って来られたこと等々を知り、わたしは大変衝撃を受けました。おじいちゃん、おばあちゃん達から当時の話が聞けたことは貴重な体験でしたね。こども達の話真剣に耳傾けて対応して下さった家族の方々の心優しい存在はどれ程大きな支えになったことでしょうか。家族と話し合え、その手応えはそれぞれですが、これから自分たちの目指す平和への方向性をしっかりつかみ、覚悟のような確信を力強く感じ取りました。一中略— 皆さんの未来に穏やかな、優しく、たのしい平和が輝きますように心から祈っています。」最後に校長先生はじめ諸先生方へのお礼と感謝の言葉で締めくくられていた。

そんな手紙のやり取りのあと和庄公園にある和庄防空壕跡での慰霊祭を和庄中学校の3年生が引き継ぐことになった。(戦後70年までは和庄公園近隣の宮本さんが自費で慰霊祭をされていたが、ご高齢で70年を節目に辞められた後の取り組みになった。)

中峠房江の平和活動は紙芝居『ふうちゃんのそら』を演じるだけに留まっていなかった。その紙芝居を見た人々の心を揺さぶり平和の種をまき、平和であることがいかに大切であるか、その思いを継承していくことがいかに大切であるかを自ら実践している。

この紙芝居によって「世界には、まだまだふうちゃんのように空を見上げられない子どもたちが沢山いるんだよ。そんな子ども達のために何ができるのかを一緒に考えていこうよ!」と語りかけてくる中峠とよこみちの思いが人類にとって「本当の平和とは」「本当の幸せとは」何かを考える機会を与えてくれる。当たり前のことが当たり前理解されにくくなりつつある時代だからこそ平和紙芝居『ふうちゃんのそら』の果たす役割は大きいのである。

【注】

- (1) 新潟青陵大学短期大学部 幼児教育学科1年、紙芝居特別講座(2018年2月14日、127名)(2019年2月12日、125名)と千葉県野田市教育委員会主催による保育士55名対象の紙芝居研修会(2018年5月29日)にて平和紙芝居『ふうちゃんのそら』を実演した。事前に質問紙を配布し回答は自由意思によるものであること、結果を集計して報告書にまとめることについて説明したうえで無記名式の自由記述のアンケート調査を実施した。

【引用文献】

- 1) 紙芝居文化の会が「世界KAMISHIBAIの日」についてHPに掲載すると同時にポスター、チラシ等を会員に送付した。会員数922(国内:個人570、団体12 海外:個人326、

団体14)

- 2) 関屋ひろみ 2017「紙芝居に平和と未来を託して」子ども文化研究所『子どもの文化』第49巻1号 pp.40-41
- 3) 厚生労働省 (2018)、「保育所保育指針解説」

【参考文献】

- 紙芝居文化の会 2017『紙芝居百科』(童心社)
- まついのりこ 1998『紙芝居・共感のよろこび』(童心社)
- 鬢櫛久美子・野崎真琴 2009「戦時下における紙芝居の議論—雑誌「紙芝居」を中心に—」名古屋柳城短期大学『研究紀要』31号 pp.43-55

正司顯好 (埼玉東萌短期大学教授)
浅井拓久也 (秋草学園短期大学准教授)